

継母の心得 9

◆サリー
シモンズ伯爵家の侍女。

◆オリヴァー
イザベルの弟で、シモンズ伯爵家の跡継ぎ。しっかり者だが、少々毒舌。

◆ピーちゃん
ディバイン公爵家に保護された赤ちゃん。どうやら前世の記憶があるようだ……

◆イーニース
グランニッシュ帝国第二皇子。ノアの親友。

◆テオバルド
ディバイン公爵家の当主で、イザベルの夫。極度の女嫌いだっただ、今はイザベルを溺愛している。

◆ノア
ディバイン公爵家の跡継ぎ。イザベルのことが大好き。

◆イザベル
マンガ「氷雪の英雄と聖光の宝玉」に出てくる悪辣継母キャラとして転生した元日本人。前世の知識を活用して次々と新商品を作り出し、この世界に旋風を巻き起こしている。

目次

継母の心得 9

7

イーニース先生と、生徒ノア

243

お菓子缶とブリキのおもちや

265

継母の心得9

プロローグ

昨夜からの雪が高い壁を築いた冬の朝、真っ白に染まる外とは正反対に、暖かな屋敷内では多くの使用人たちが忙しなく仕事をこなしていた。

今やディバイン公爵家タウンハウスでの食事は家族皆でとるというのが慣例で、本日ももちろん全員揃って席に着く。

使用人によって迅速かつ丁寧に朝食の準備がなされ、食卓には、皿の底に描かれた繊細なボタニカル画がはつきりと見えるほど透き通ったコンソメスープ。

スプーンで触れるとふんわりとろけるチーズオムレツに、朝採れシャキシャキサラダ。

そこにシェフ特製の無限に食べられると評判のドレッシングがたっぷりかかっている食欲をそそる。

焼きたてのふわふわパンやヨーグルト、フルーツの盛り合わせなども並び、わたくしの横では子供たちが美味しそうに頬張っていた。

「おむれちゅ、おいしいね。ペーちゃん」

「にゃ！ ペえちゃ、ちゅっき！」

以前は食の細かったノアが、今ではオムレツをパクパクと口に運び、「おいしい、おいしい」と満面の笑みを浮かべて、お腹いっぱい食べるようになった。

クレオ大司教からお預かりしている赤ちゃん、ペーちゃんもそんなノアにつられてか、よく食べ、よく笑う。

「あ、ペーちゃんほっぺに、ついてるのよ」

「にゃ？」

「わたし、ふきふき、してあげる」

「にゃーい！」

ノアがペーちゃんの世話を焼く様子に和みながら、わたくしはフルーツの盛り合わせに手を伸ばす。

「ん、酸っぱ……っ」

口の中に広がるリンゴの酸味の襲撃に、油断した！ と、ぎゅっと目を閉じた。

日本で生きていた頃の甘いリンゴをイメージして食べてしまったから、前世とのギャップに脳が追いつかないことがある。

ああ、前世の甘い果物が懐かしいですわ……

農家さんの努力で、品種改良を繰り返して出来上がった糖度の高い果物を思い出し、無性に食べたくなった。

あの味を子供たちに食べさせてあげたいものだ。

そういえば、わたくしが前世の記憶を思い出してから、もうすぐ二年ですのね。

ディバイン公爵家に嫁いでノアと出会い、色んな事件が起きて、家族の絆を^{きずな}深めていった時間が、たった二年の間の出来事だとは信じられない。

あとひと月も経たないうちに、ノアは五歳になる。

五歳はこの世界では節目の年で、教会で『祝福の儀』という神から魔法の使用を許される儀式を行うことが慣例だ。

死亡率が高い世界だからこそ、そこで親は子の成長をより実感する。

日本で言う、七五三みたいなものですね。

ノアはすでに魔法を使えるのだが、やはり五歳という年齢は、わたくしにとっても感慨深いものがある。

わたくし一人では、到底子育てなんてできなかっただろう。

周りの支えがあったからこそ、ノアはここまで健やかに育ってくれた。

「おくち、ふきふき！」

「おっち、うっち、うっち〜！」

赤ちゃんのお世話までできるようになったのね。

ずっとそばにいるから、気付かない成長もあって、見えない速さで成長して一気に大人になるような、不思議な感覚。

振り返るとあつという間だなんて、寂しいような、嬉しいような。たまにどうしてか、涙が出そ

うになりますの。

「はい、ペーちゃん。きれーよ！」

「あーちょー！」

犯罪組織エンプティが教会に関係しているのではないか、と危機感を募らせたクレオ大司教から、お孫さんであり、教皇でもあるペーちゃんを守るために、このディバイン公爵家でお預かりしてから、それほど日は経っていない。

それなのにノアはすっかりペーちゃんのお兄ちゃん、使用人たちも二人が昔から仲良し兄弟であつたかのように温かく見守っている。

おそらく「ありがとう！」とお礼を言っているペーちゃんと、うふふつと愛らしい笑みを浮かべる愛息を見て、この平和な時間が長く続けばいいのにと思わずにはいられない。

「あ、ペーちゃん、きよお、すうききよ、あいにくひ？」

ノアが思い出したようにペーちゃんに話しかけている。
わたくしも、そういえば……と、ペーちゃんを見た。

「にゃ……」

どこか困ったような、照れたような表情のペーちゃんに、赤ちゃんだけど、表情が豊かね、なんて思っていたら、ノアが首を傾げて聞いた。

「ペーちゃん、すうききよ、あいたくない？」

ノアが言う「すうききよ」とは、ウィーヌス枢機卿のことだ。

犯罪組織エンプティと共謀し、実は教皇であるペーちゃんの命を狙い、ノアと、フロちゃんこと、聖女フローレンスを誘拐した極悪人……だと思っていたのだけど、実際は奥様の病気を治す方法と子供の行方を知るためにエンプティに潜入していた愛妻家でした。

奥様が亡くなったあと、その遺体を冷凍保存し、氷の魔石が尽きかけたからと、魔力を補充する目的でノアを誘拐したのは未だに許せませんけれど、悪い人ではありませんでしたのよね。

まあ、死者を蘇生させようとフロちゃんまで誘拐した、狂愛妻家ではありませんでしたけど……

「にや……ちあう。ぺえちや、うちゅ、あつちゅ……」

「あいたくない、ちがう？ ペーちゃん、ふくざちゅ？」

ペーちゃんは、ウィーヌス枢機卿と定期的に会うことが、内心複雑なのね。そうよね……いくら実父でも、ペーちゃんを教会から追い出そうとしていた人ですもの。

ペーちゃんが教皇であることを公にしていけないとはいえ、エンプティが干渉している教会では特に、教皇という立場は利用されやすい。ましてや幼いペーちゃんは利用されるか、命を狙われるかだ。

枢機卿が幼子を守るために教会から追い出そうとした、というのわからなくはないが、実際冷たくあしらわれていたペーちゃんからしてみれば、打ち解けるには少々時間が必要だろう。

ウィーヌス枢機卿も、探していた我が子がペーちゃんだとは思いついたろうし、なんだから複雑ですわよね。

「しょうなのね……あつ、くれおだいしきよー、あえるのよ！」

「にや！ うえお！」

あらあら、クレオ大司教の話になったら、ペーちゃんは大喜びですわね。

今ではペーちゃんを目に入れても痛くないほど猫可愛がりのウィーヌス枢機卿が、落ち込む姿が目に見えますわ。

「ベル、そのクレオ大司教だが、枢機卿に選定されたようだ」

ノアとペーちゃんの話に出てきたからか、わたくしの夫であるテオ様が突然、話を振ってききましたのよ。

「まあ。ウィーヌス枢機卿が辞任されて、後任はクレオ大司教が有力だと噂がありましたけれど、ついに決定いたしましたのね！」

クレオ大司教なら、エンプティの排除と教会の正常化に尽力してくれそうですわ。

「枢機卿の任命式がこの春に行われる」

冬は雪で交通機関がストップしますものね。春に行うのは妥当ですわ。

そう聞いていた時だ。テオ様が聞き逃さないことを口にした。

「そのため、本来春に行うはずだったノアの祝福の儀が、五月か六月にずれ込むだろう」

「しゅくふくのぎ、じゅれる？」

「じゅーりゅ？」

テオ様の話に、ノアとペーちゃんが揃って首を傾げ、プレーリードッグの兄弟のようで可愛らしいことこの上ないが、そんなことを思っている場合ではない。

すでに春用の衣装や装飾品を、注文しておりますわよ!?

「それなら、すぐにでも注文を変更しませんと!」

一、二ヶ月ずれると、素材や色が変わりますのに!

第一章 新素材の名前

ノアの祝福の儀がずれ込むとわかつてすぐ、交通が麻痺している真冬ながら、タウンハウスから妖精経由で本邸を通してデザイナーへ手紙を運んでもらい、なんとか良い返事をいただいて安堵いたしましたわ。

とはいえ、ディバイン公爵領の領都は贅沢にも、メインの道には火の魔石を埋め込んで雪を溶かしているし、他にも色々な工夫をしているので、馬車も人も問題なく通行できますのよ。通行できないのは街の外だけですの。

だからデザイナーとのやり取りは問題なくできるのだけれど、材料などは領地外から取り寄せることもあるから、それが問題ですわ。

そのうえ、わたくしたちはタウンハウスにいるわけで……まあ、その気になれば一瞬で行き来できるのだけ。

快諾してくれたということは、材料を多めに仕入れていたのですね。

さすが、公爵家お抱えのデザイナーだけありますわ。緊急時の備えも万全ですわね!

「奥様、お時間です」

デザイナーから届いたデザインを確認していると、そこへわたくしの侍女であるミランダがやってきて、時間を伝えてくれた。

「会議は、一階の大会議室でよくて？」

「はい。皆様お集まりになっております」

そう言われて、わたくしは急ぎ大会議室へ移動した。

本日は、ディバイン公爵のタウンハウスにて、おもちゃの宝箱支店とベル商会幹部の会議が開かれている。

当然テオ様とわたくしも、この会議に出席しているのだけれど、そこに皇后様の姿があるのはどうしてなのかしら？

「邪魔はしないから、見学させてちょうだい！」なんて言われて、少し離れたところから目を輝かせている皇后様は、好奇心を抑えられない少女のようでとても可愛らしい。

「——おもちゃの宝箱で赤ちゃん用品を売り出しましたが、思っていた以上に売上が良く、専門店にすべきではないかという案が上がっております」

まずは帝都支店のことからですね。

季節柄、残念ながら本店の代表は来られなかったけれど、支店も本店も話は詰めておかないといけませんわね。

赤ちゃん用品は、ヒット商品のスライムオムツをはじめ、ベビーベッドや折りたたみ式ベビーカーなどの大物から、ベッドメリーやガラガラ、おしゃぶりや哺乳瓶、スタイなどの小さなものま

で取り揃えている。なので場所を取ってしまうため、わたくしも別にした方が良いかと思っていたところだった。

「場所は、おもちゃの宝箱の隣が良いのではないかと思っておりますが……」

帝都支店の隣って……空いていたかしら？

「お待ちください！もし、隣に店をというのであれば、赤ちゃん専門店ではなく、カフェも別にしてはどうでしょうか。そして今あるカフェの場所をおもちゃ売り場とし、一階に赤ちゃんグッズの売り場を広く取れば良いと思います」

なるほど。確かにカフェは大人気で、席が空くまで結構な時間お待たせしておりますものね。

最近、帝都支店でも本店でもドライブスルーも始めて、道路の混雑は緩和されましたけれど、それでも店内の混み具合は相変わらずですよ……。完全に分けてしまえば席数が増えるし、ドライブスルーの専用レーンも作れますわ。

「カフェを隣に移すのであれば、思い切っておもちゃの宝箱と通路で繋げるのはどうでしょうか」そうすると行き来しやすいですね。

「いくら隣接しているとはいえ、建物の構造上それは危険ではありませんか？」

「新素材を使用すれば、安全性は上がるのでは？」

「確かに新素材であれば……」

皆の話が新素材のことに変わっていつているので、わたくしはここで手を挙げましたの。「皆様、わたくし前々から気になっていたのだけれど」

わたくしがこう切り出した途端、誰もが口を噤み、緊張感が増す。

「新素材に名前をつけませんか？」

「「!?」」

いえね、新素材を原料にゴムやプラスチックが作られておりますのよ。それらも新素材でしょう。なんだかややこしいですし、今後も新しいものが開発されていくわけですから、いつまでも新素材と呼ぶのはおかしいと思いますのよ。

「奥様のおっしゃる通り、他の素材と区別するために新素材に正式名称は必要かと思われます」
誕生日席に座るテオ様の右側に、書類を手に立つウォルトが賛同し、皆もちよっとホッとした様子で頷いている。

気になった、と切り出したからか、何か注意されると思わしてしまったのかしら。申し訳ないことをしましたわ。

「ベル、新素材には国が深く関わっている。そして生産しているのはシモンズ伯爵家なのだから、その議案はシモンズ伯爵と皇帝陛下も交え議論した方が良好だろう」

テオ様にもっともなことを言われ、ちよっと恥ずかしくなりましたわ。

今や新素材はグランニツシュ帝国の産業の中心にある。それを生産しているシモンズ伯爵と、皇帝夫妻、ディバイン公爵の話し合いが必要だろう。

「そうですわよね。先走った発言でした。申し訳ありませんわ。旦那様」

「いや、名称に関しては私も考えていたところだ。また、シモンズ伯爵……義父上に連絡後、皇帝

夫妻に面会の約束を取り付けよう」

「このように些細なことで、両陛下のお時間を頂戴してしまっても大丈夫でしょうか……」

皇后様をチラリと見ると、大丈夫よ！ という表情で大きく頷き、ウインクされてしまった。

「その他にも話し合いたい議題はあるからな。大丈夫だ」

「そうですね。少し安心いたしましたわ」

その後会議は、カフェを移転する方向でまとめ、赤ちゃん用品の拡充に伴った新商品開発をすることとなった。本店の赤ちゃん用品の取り扱いについても併せて議論され、足並みを揃えることで決定した。

「あの……」

会議もそろそろ終わりかと思っていたその時、ベル商会の男性スタッフがおそおそと挙手する。

「実は一部の缶の製造元から、苦情が入っております……」

缶？

苦情という言葉でその場に緊張が走る。

「新素材のせいで生産数が激減し、新設したばかりの工場を閉鎖せざるを得なくなった。多くの失業者を生んでいる責任をどうとってくれるのか、と……」

「待ってくださいまし！ 新素材で生産しているものは、今まで世になかったものばかりですわ！ 競合しておりませんのに、どうしてそんなことに……!?」

スタッフの話にわたくしは戸惑うばかりだ。

「それが、ベル商会で扱う商品の入れ物が、本来は缶だったはずなのに、新素材でパッキングされ迷惑していると主張しているのです」

元々ウチは新素材ありきで容器を開発していて、缶を容器にする予定はありませんでしたのに？
「言いがかりね」

皇后様が眉間を揉みながら溜め息を吐く。

「その製缶業者というのは、三年前に元デルベ伯爵夫人が出資の約束をして、ディバイン公爵領に缶工場を新設した業者のことか」

テオ様が表情を陰しくして、発言した男性スタッフを見ると、彼は声を裏返しながらも「おっしゃる通りです」と答える。

テオ様に睨まれながらもきちんと返答できるのは、さすがですわ。

氷の大公に睨まれて話ができる人はそうそういない。声が出なくなるか、威圧感に耐えきれず失神することがほとんどなのだ。

我が夫ながら、周りに怖がられておりますわね。あら、わたくしたちもしかして、悪役夫婦というやつかしら？

「そういえば、デルベ伯爵領は鉄の採掘と製鉄業が盛んですものね」

デルベ伯爵夫人、苛烈な方でしたわ……と、つい遠い目をしてしまう。

「製鉄業自体は今でも帝国の要の産業よ。デルベ伯爵領は鉄の採掘量も製鉄技術も帝国一だし、缶も新素材が発見されるまでは、次世代の保管容器として有望視されていたしね」

だからこそ、社交界でも権勢を振るっていたのですわね。

皇后様の話に、ディバイン公爵家ですら我が物顔で歩いていた夫人を思い出し、納得してしまう。

「缶といえば、缶詰って、開けるのが大変だから不評なのよねえ」

皇后様は嫌そうな顔をしてぼやいている。

もしかして、騎士団から苦情でも上がっているのかしら？

遠征する機会が多い騎士団には、缶詰が卸されているでしょうし。開けるのが大変って、タブが付いていないからですわね。缶切りも発明されていないし……

「開けるのが大変なのは、身に染みておりますわ」

わたくしも、実家にいたときは貧乏でしたから、安くて保存がきく缶詰を重宝しましたのよ。でもね、ノミとハンマーで開ける仕様ですの。中の汁が顔に飛び散ることもあって、ものつすぐく面倒で大変ですよ！

「普及している保存容器とはいえ、工場を新設したはいいけど、新素材が開発されて、予想よりも稼働率が低くなり、さらに出資者もいなくなったとなれば、こちらに矛盾が向くわよね」

皇后様は何とも言えない表情でわたくしを見る。

「つまり、その製缶業者は、缶工場を閉鎖したくないから、新素材よりも缶の普及を、と言っておりますのね」

なるほど。まさしく言いがかりですわ。

皇后様の話に苦笑いしてしまう。

テオ様も呆れた顔で話を聞いていた。

「ベル、私からその業者に忠告しておく。君が気にすることはない」

テオ様の言葉に、発言した男性スタッフが安堵しているのを見て、彼がここで発言した意図を知る。

言いがかりとはいえ、無碍に対応すると、他にも派生しかねない問題だ。大事になる前にデイバイン公爵家から圧力をかけてもらえれば、とても思っているのだろう。

しかし、彼には申し訳ないのだけれど、わたくし、缶に商機を見出しましたわ。

「テオ様、お心遣いに感謝いたしますわ。ですが、缶工場の件はわたくしにお任せいただけませんか」

会議が終わって解散したあと、部屋の中に残ったのはわたくしと皇后様とミランダだけだった。

「――それで、テオ様に啖呵を切っていたけど、イザベル様は何をする気なのかしら？」

子供のようにわくわくと目を輝かせて、面白い話を聞かせてよ、と言わんばかりに身を乗り出す皇后様に対し、わたくしは半笑いしながら話を切り出す。

「皇后様は缶詰の容器が何でできているかご存知ですか？」

「何って、缶じゃないの」

当たり前でしょう、と小首を傾げる皇后様に、わたくしは続ける。

「言い方を変えますわ。缶が何でできているか、ご存知ですか？」

「そりゃ鉄を加工して……って、イザベル様は缶作りの工程に何かを見出したわけ？」

最近推理ものの小説にはまっている皇后様は、一言二言話しただけでも推理しようとする変な癖がついてしまっている。今も頭をフル回転させて、わたくしの言葉を一言一句聞き逃さないように睨みつけてくるのだ。

「ちょ、皇后様、わたくしミステリーを供給しているわけではありませんのよ」

「あら、オホホッ。相手がイザベル様だからつい」

わたくしだから推理を始めるってどういうことですか？

笑って誤魔化している皇后様を問い詰めたのはやまやまだけど、遊んでいる場合じゃありませんのよ。

「話を戻しますが、缶は鉄を錫で覆ったブリキを加工して作られますの」

人体に安全で、かなり優秀な保存容器なのだが、缶詰に多く使われているのが現状のようだ。

「もしかして、ブリキを缶以外で使うつもりなのかしら？」

イザベル様のことだから、ありえない使い方をする気だろう、とでも言うような顔で目を爛々とさせている皇后様に肯定の意を含めて微笑んだ。

「ブリキのおもちゃとお菓子缶を作りたいと思いますの」

だってわたくし、おもちゃ屋さんですもの。

「ブリキでおもちゃってという発想は面白いけれど、お菓子缶？」

皇后様が訝しげに思うのも無理はないですわ。お菓子缶自体は存在しておりますものね。ただし、

シンプルで飾り気のない容器として。

「現在のお菓子缶は保存や衛生面で優秀であるにもかかわらず、シンプルな容器なので庶民には馴染み深いですが、貴族には敬遠されがちですわ」

「だってシンプルって聞こえはいいけど、飾り気がなくてお土産にも、自分のご褒美にも買う気は起きないわよ」

そうですね。かといって絵を描こうにも、水性絵の具だとはじいてしまっし、油性絵の具だと変色しますのよ。表面がツルツルなんですよ。

「そこでわたくしが提案するのが、『エンボス加工缶』ですわ」

「えんぼす、加工缶？」

聞きなれない言葉に戸惑う皇后様へプレゼンを続ける。

「平たく言えば、型をとって柄を付けた缶ですわ」

「ああ！ 型を押し付けて、凹凸をつけて柄を浮かび上がらせるってことかしら！」

そう！ わたくしデパートで売っているような、あの可愛いお菓子缶を作りたいのですわ！ おもちゃ売り場にブリキのおもちゃと共に並べても、可愛さマシマシだと思いますのよ。

「さらに給付けをして、新素材で表面をコーティングすれば、さらに華やかになりますわ。先ほど皇后様がおっしゃっていた、自分へのご褒美に最適ですし、食べ終われば小物入れやインテリアにもなりますの」

「ちよっ、イザベル様天才じゃない！」

「フフフ、限定商品で人気絵師様に給付けしてもらったり、子供たちが好きな絵本の柄にしたりするのいいかもしれませんわね」

大好きな絵本を読みながら、その絵本の柄のお菓子缶に手を伸ばすノアを想像して、間違いない！ と興奮してしまう。

「最っ高！ イーニアスも喜びそうだわ」

二人で盛り上がり、わたくしはさっそく提案書を作成する。

「本当、イザベル様ってすごいわよね」

提案書を書きながらいる際、皇后様が隣でそんなことを呟るので、つい、皇后様の方がすごいと思います。そうストレートに返してしまいましたわ。

「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない」

フツとハンサムに微笑む皇后様は、男性に生まれていたら女性陣の間で取り合いになっていたことだろう。

「アタシが言いたいののは、言いがかりをチャンスに変えてしまっ、前向きなところを尊敬してるってこと」

「まあっ、そのようにおっしゃってくださいるなんて、ありがとう存じますわ」

照れながらもお礼を言うと、その美しい笑顔を深めてウィンクするではないか。

これは同性でもドキドキしますわ！

「そ、そういえば」

褒められたことへの照れに耐えられなくなり、話を逸らす。

「新素材の名称の件ですけれど、真冬の今、父が帝都に来るのは難しいのですが、春になってから決めますか？」

「あら、シモンズ伯爵ならアタシが迎えに行つてあげるから大丈夫よ！ 春は何かと忙しい時期だし、一泊くらいなら伯爵にも迷惑がかからないでしょう？」

そう皇后様が提案してくださったが、それはそれで、お父様がひっくり返りそうですわよ。

「それよりイザベル様、さっきの会議で言っていた、おもちゃの宝箱をおもちゃ屋とカフェに分ける件だけど、もちろん商品を増やすのよね？ 拡大させるって言っていた赤ちゃん用の新商品、一体何を作る気での？」

皇后様には生まれたばかりのリユーク第三皇子がいっしょやるからか、ベビー用品に興味津々みたい。

「今考えておりますのが、オムツとベビーバス、あとは馬車用チャイルドシートやスキンケア商品でしょうか」

リッシユグルス王国で紙が開発されたから、紙オムツを作れるのか研究したいですし、馬車でノアを見ていたら、チャイルドシートがないと危険な気がしますよ。ノアが誘拐された時も座席から転がり落ちそうだった、とチロに聞いて血の気が引きましたもの。

「オムツやベビーバスはもうあるじゃない。それなのに新商品を作るの？ ちゃいるど、なんとかっていうのはよくわからないのだけど、なあに？」

皇后様は開発に着手すらしていない商品に関してもグイグイ質問してくる。余程気になるのだろう。

好奇心旺盛だからこそ、皇后の仕事も楽しくやれているのかもしれないわね。

「皇后様、まだ着手しておりませんのでなんとも言えませんが、新型馬車と同程度には、衝撃的なものを開発してみせますので、少しお待ちくださいませ」

「新型馬車と同程度!? イザベル様、それ、企画書ができた時点でアタシに見せてちょ……」

「皇后陛下、ベル商会の新商品情報を手に入れようとしないうでいただきたい」

目を輝かせて、ノアと同じお願いポーズをする皇后様にたじたじになっていると、テオ様が救いの手を差し伸べてくれた。

わたくしと皇后様が会議室から出てこないから、様子を見にきてくださったのね。

「テオ様、誤解しないでください！ アタシは商会の情報を仕入れようとしているんじゃないの。イザベル様がヤバいものを作り出すんじゃないかって、警戒してるのよ！」

ええ!?

「ちよつと皇后様!? わたくし危険人物ではありませんのよ!」

失礼なことを言う皇后様に抗議すると、テオ様まで「すまないベル。それは否定できない……」なんて言うものだから、地団駄踏みそうになりましたわよ。

「二人とも、わたくし企画書を作りますので、それを見てからおっしゃってくださいまし！」

ノアがここにいたら、「おかあさま、ぶんぶんちてる?」と言われそうなほど、ほっぺを膨らま

せ、ミランダに生温い目で見られながら会議室を出たのだ。

「ほっぺをリスのように膨らませるなんて、イザベル様は可愛いわ」

「ベルが何をしても可愛いのは知っております。私の妻ですから」

後ろから聞こえてきた二人の声に顔が熱くなり、逃げるようにその場から遠ざかった。途中使用人たちからも生温い目を向けられたけれど、気付いていないフリをしましたわ。

「——この時期に缶の製造工場の閉鎖なんて、隣国との戦争を回避したと関係があるんでしょうね……」

「おそらく、戦争を進めていた者の指示で、エンブティが工場を買収したのでしよう。缶の原料は鉄ですから、武器に転用することもできる上、缶詰は兵の食料としても重宝する……」

「でしようね。けれど戦争がなくなっただけで、処分せざるを得なくなっただけ、と」

「ベル商会に言いがかりをつけ、大事にしてから関係者を切り捨て、そのまま逃走を図る気でしょう」

「ディバイン公爵、あとは任せてもいいかしら？」

「はい。こちらで処理しておきます——」

テオ様と皇后様がそんな話をしているとも知らず、わたくしは手を広げすぎた仕事をどう処理していくかで四苦八苦していた。

「はあ、何から手を付けたらいいかしら……」

缶や新商品のことなど、しなければならぬことが山積みだったので、仕事部屋へ閉じこもるとリッシュグルス王国で製造された紙を大量に取り出す。

そして、怒涛^{どたう}の勢いで企画書をしたためる。

すると扉の随分下の方からノックが響き、扉がゆっくりと開いた。クマさんの顔が付いた可愛い靴が、隙間から覗く。

「おかあさま、おさんぽのじかんよ」

「かあちゃ、うちゃ、じーによー」

ノアとペーちゃんがお散歩にお誘いにきてくれたことで、時間が経過していたことに気が付く。

「あらあら、もうお散歩の時間でしたのね。二人とも、迎えにきてくれてありがとう存じますわ」

「はい！」

「にゃ！」

ノアとペーちゃんはおててをつなぎ、片手を挙げて元気にお返事すると、可愛い笑顔を振りまいてくれた。

子供たちとの時間は、やっぱり癒されますわ。

「そうだ！ ペーちゃんに試してもらいたい、靴がありますの」

赤ちゃん用の、音が鳴る靴の試作品が出来上がっていたので、ちょっと試してもらいたいと思い、ミランダにお願いして持ってきてもらう。



「ぺえちゃ、うちゅ？」

おめめをばくりして、小さな靴を見ているペーちゃんを微笑ましく思いながら、履いてみるよ
う促す。

「マジックテープで留められるようになっておりますの」

マジックテープをペリペリと外し、手のひらに収まる小さな足に靴を履かせる。

「わたしと、おんなじおくちゅ！」

自分のスニーカーと同様の仕様に、嬉しそうにわたくしを見上げるノアが愛らしい。

「そうですわね。ノアもマジックテープの靴を持っていますものね」

ペーちゃんとお揃いだ、とはしゃいでいる息子に笑みが漏れる。

「はい。ペーちゃん、これで歩いてみてくださいまし」

「にゃー！」

ペーちゃんはいつものように、子猫のような返事をして、一歩踏み出した。

ぷく……きゅうく

気の抜けたような音が耳に届き、思わず吹き出しそうになる。

「にゃ!?」

「ペーちゃん、おくちゅ、おうたうたってるのよ！」

「うちゅ、おーちゃー！」

ぷつきゅ、ぷつきゅつ。

今度は弾んだ音を出す靴に、ペーちゃんもノアも夢中だ。

「わあっ、奥様、ペーちゃん様の靴、音が出るんですね！」

ノア付きの侍女であるカミラが、可愛い！と絶賛してくれるので、音が鳴る靴が必要な理由を伝えると、感心したように頷いている。

「なるほど、音が鳴ることで、思いがけない行動をしてしまう幼い子の位置を、親御さんが把握しやすいということなんですわね！」

うるさいというクレームが来るかもしれないけれど、子供の命には代えられない。

それに、わたくしはこのぷつきゅ、ぷつきゅという音は、とても可愛いと思いますのよ。だって、小さなあんよで一生懸命歩いている音だと思つと、愛おしくて頬が緩んでしまいますわ。

「ノアが歌う靴だと言っていた通り、本当に、歌っているようすわね」

元氣いっぱい、可愛いお歌ですわ。

「——子供の安全や、子育てのしやすい環境を考えると、新商品の数がどんどん増えてしまいますわね」

数日かかってまとめた企画書は、週刊少年漫画ぐらい分厚いものとなってしまった。

いくらノッていたとはいえ、やり過ぎたかもしれないとちらりと思つたが、書いてしまったものは仕方がない。

せっかくなので一気に開発を進めたいと思う。

もちろん企画書を見たテオ様に反対されたら、開発は難しくなるかもしれませんが……

「いつも企画書を提出する時は、ドキドキしますわ」

こういう時は、自分の旦那様とはいえ、上司の気分ですよ。

今回、一番優先したいのは、馬車のチャイルドシートだ。

考えているのは、ベビーカーの座席部分を取り外してチャイルドシートにもできるものと、六歳くらいまでは使えるものの二点。

テオ様にこの企画書を見せたらすぐ、試作に取りかかりたい。

「チャイルドシートができるまでは、ノアを安心して馬車に乗せられませんわ……」

どんどん過保護になっている気もするが、我が子の安全を一番に考えない親はいないだろう。

『ベル、チャイルドシート、ヒツヨーナノ』

「そうですわよね。チロ」

チロは、チャイルドシートの大切さをわかってくれたようすわ。さすがチロ。

「さあチロ、テオ様にこの企画書を提出しにいきますわよ」

『イクノ』

いざ、旦那様のもとに！

「——ベル、君はまた……」

ふふん。その反応、いつものパターンですから慣れてきましたわ！ わたくし頭を抱える旦那様には動じませんわよ。

「なぜ勝ち誇ったような表情をしている……？」

「ホホホッ、いやですわテオ様、勝ち誇った表情などしておりませんわ」

『ベル、フフンツテカオ、シテタノ』

こらチロちゃん、そんなこと言っちゃダメですわよ。

「……はあ、まずは製缶業者の件だが、元デルベ伯爵夫人が出資予定だったということからエンプティとの繋がりを調査したが、証拠は出てこなかった。しかし、多方面で悪質極まりない商売を行っていたことから、経営者を捕らえている」

え!?

それではブリキのおもちゃやお菓子缶を作れませんの!?

調査をしてくださったのはとてもありがたいが、ノアにサプライズできると思っていたのにと、シヨックを隠し切れないわたくしに、テオ様は安心させるような声で言う。

「ベル、製缶工場を取り潰す気はない」

「それは、経営者が代わるだけで、閉鎖は免れたということですよ?」

テオ様は頷き、まっすぐわたくしを見た。

「どうやら工場の経営者を騙し、奪ったものだったようだ。元の経営者に返還し、彼らが引き続き運営していく」

まあっ、詐欺師でしたのね!

「では、元の持ち主に交渉したらよろしいのね」

「そうするといい。交渉にはベル商会を間に入れるように。くれぐれも自ら動くとはしないでくれ」

胸を撫でおろすと同時、しつかり釘を刺されましたのよ。

「それと、このチャイルドシートとやはらは、法律で定めるべきか慎重に判断したい。まずは試験運用からだ」

企画書内に法律に言及してしまった文言があったからか、そこはテオ様も慎重だ。確約はいただけなかったが、頭の隅には置いてもらえただろう。

わたくしが口を出していい問題ではないとわかっておりますが、子供たちの安全に直結する法律は早急に整備していただかないと、安心できませんわ。

「その他の商品については、商会と相談しつつ進めるといい」

「フフッ、いつも自由に好きなことをさせてくださる旦那様を、わたくし世界一尊敬しております」

上司にしたい人ナンバーワンですわ!

「尊敬……そこは愛している、と言ってもらいたいものだ」

少年のように不満げに口をとがらせて鼻を鳴らし、それでも愛おしそうに見つめてくるテオ様に、わたくしドキドキが止まりませんでしたわ。

『イイフンイキナノ』

もう、チロったら。からかわないでちょうだい。

「そういえば、他の妖精たちはどこに行ったのかしら？」

いつも賑やかすぎる妖精たちがおらず首を傾げるが、自由な彼らのことだ。旅行にでも行っているかもしれない。

旅行するキノコ妖精たち……想像すると面白いですわ。

こうして、ノアの誕生日や祝福の儀の準備、商会の仕事などで忙しくしていると、あつという間に月日が流れ、秘密の会合と銘打った国のトップたちの集まりが、ディバイン公爵タウンハウスでひっそりと開かれたのだ。

「それではこれより、本日の議題である新素材の名称を決めたいと思います」

ウォルトの進行が始まった秘密の会合には、皇帝夫妻、ディバイン公爵、シモンズ伯爵と、この国のトップが揃い踏み、わたくしと、シモンズ伯爵家嫡男であるオリヴァーは圧倒され、端の席に目立たないよう座っていた。

「お姉様、なんで僕がこの会合に呼ばれたんですか!？」

緊張した面持ちで膝の上の拳を震わせながら、俯き気味に小声で訴えてくる弟に、首を横に振る。「わたくしだって、なんで自分がここにいいのかわからないのに、あなたが呼ばれた理由を知るはずありませんわよ!？」

コソコソと話すわたくしたち姉弟の前で、名称の候補が挙げられていく。

「はい！ やはり次々と変化していく素材だから、朕はフォックスやラクーンが良いと思うのだ。

あるいは、シモンズ伯爵家が開発したのだから、シモンズの綴りを逆から読んで、スノミス、というのはどうだろうか」

皇帝陛下は挙手をして、意気揚々と提案すると、チラチラと皇后様を窺っている。その様子は大型犬が飼い主に褒めて、褒めてと言っているように見えて微笑ましい。

「アタシは神秘的な素材だと思うから、アルカーナ……ゴージャスに、レース・アルカーナ、なんておすすすめね」

皇后様は皇帝陛下の期待の眼差しを見事に無視して、ご自分の意見を出しているけれど、多分わざとだと思えますわ。

皇后様、なんだかんだでツンデレですものね。

皇帝夫妻それぞれの提案に、なるほど、とわたくしだけが頷いていると、今度はテオ様が口を開く。

「この素材はベルとシモンズ伯爵家のオリヴァー殿が開発したのだから、ベルとシモンズで……ベルシモン、ベルンズ、ベリッシモなどが合うのではないだろうか」

ものすごく真剣な顔で名称を考えているテオ様って、滅多に見られるものではないから、貴重ですわね。

だけど、わたくしの名前が入るのはさすがに恥ずかしいのでただけませんわ。

オリヴァーも恥ずかしそうに両手で顔を覆ってしまった。耳が真っ赤になっていて、わたくしまでいたたまれない。

あら、そういえばベリッシモって、イタリア語ですわね。ミラクルが起きていますわ。

「私も閣下の意見に賛成です。イザベルとオリヴァーの名前を取って、イザヴァーやベルオとかどうでしょうか」

お父様はちよつと黙っていてくださいませ。

わたくしとオリヴァーを見て、うんうん、と頷くお父様を見ていると顔が熱くなってくる。

「父上はあまり名前のセンスがないから……」

オリヴァーも真つ赤になつて俯いてしまう。

どんどん小さくなつていく弟の肩を、優しく叩く。かくいうわたくしも、自分の父のセンスを疑つてしまった。

イザヴァーとベルオはさすがに酷いですわよね……

「お姉様はどんな名前を考えているのですか？」

「わたくし？ そうねえ……、最初の新素材がゼロで、ゴムがアン、プラスチックがドウなんて、数字でも良いのかも、と思つておりますわ」

「なるほど……僕は、前にお姉様が言つていた、ポリカーボネイトやラテックス、ヴンダーの響きなんか格好いいと思います」

オリヴァーったら、わたくしが一度口にした名前を憶えておりましたのね。我が弟ながら、記憶力が半端ないですわ。

弟の頭脳に脅威を感じつつ、全員の意見が出揃い、集計をとることになった。

皆が出した新素材の名称候補はお父様のもの以外、どれもおしやれですわ。

「うぬ……、どれも捨てがたいのだ」

悩むフリをしながらもチラチラと皇后様を見ている皇帝陛下。構つてもらいたいのですわね。

「そうね……グランニッシュ帝国の主産業を担つていく素材だから、覚えやすく言いやすいものがいいんだけど」

また皇后様は無視されて、シュンと沈んでいる皇帝陛下は大属性男子かもしれない。

皇后様がおっしゃることはもつともですわね。でしたら、やつぱり数字かしら。

「であれば、『ベリッシモ』だろう」

わたくしが数字を提案する前に、ドヤ顔で高々と宣言した夫。

しまった、出遅れましたわ！

「そうね。アタシはテオ様に賛成よ！」

テオ様の言葉にすかさず賛成したレーテ様、ブレませんわね。

「奥様とシモンズ伯爵家の名を冠した名称ですわね」

ウォルトが眼鏡を光らせながら頷くと、オリヴァーまでテオ様に一票を投じた。

「僕もお義兄様のセンスに間違いはないと思うので、賛成です」

オリヴァーも実はテオ様に懂れておりますのよね。

「私のベルオやイザヴァーはダメかい？ 閣下と同じようなものだと思うのだけど」

「全然違いますよ」

即座に否定！

弟の冷たい眼差しに、お父様はタジタジですわ。

「そ、そうかい？」

お父様、オリヴァーからはつきり言われて悲しいからって、捨てられた子犬のような目でわたしを見るのはやめてくださいまし。フォローできませんわ。

この場合は犬属性男子過多だと思うのはわたくしだけかしら。

「アタシの案のレース・アルカーナは、イザベル様が開発した化粧品ブランド名にするのはどう？」

ここですかさず提案する皇后様、さすがです！

「あら、良いですわね。上品で神秘的な名前ですし、今後は教会と共同で、と考えておりましたので、ちょうど良いですわ」

素敵なブランド名を付けてもらって、わたくし幸運ですわね。ブランド名って、イメージが先行する化粧品では特に重要ですね。

「ん……？ イザベル様、聞いてもいいかしら？」

あら？ 皇后様のお顔が引きつって……？

「どうかなさいましたか？」

「ねえ、どうして教会と共同で化粧品開発をする気での……？」

「いやですわ、皇后様。もちろん、わたくしが作り出した化粧水の成分に、聖水を使用しているからですのよ」

「聖水!?」

成分を聞いて仰天している皇后様に、わたくしはこの化粧水ができた経緯を説明しましたの。

「実はこのスキンケアは……」

一年近く前の冬の日を思い出す。これはノアのためにできた化粧水。偶然が重なってできたものが、とうとう商品化するのね――



「――の、ノアのお肌が、荒れておりますわ!!」

冬場は肌が乾燥しやすい季節。

それはよくわかっておりますが、ディバイン公爵家に来てからは、わたくしにエステ隊がついておりますでしょう。だからお肌の調子は快調で、気になりませんでしたの。

けれどこの油断が、いけませんでしたの。

ノアと手を繋いだら、カサツとしておりましたのよ！

よく見たらほっぺもカサついておりますし、赤みまでさして……っ。わたくしの可愛い息子のお肌が、乾燥している!!

「か、カミラ、これはどういうことなのかしら!?」

カミラを振り返ると、彼女は申し訳なさそうに眉尻を上げて話すのだ。

「奥様……実は、ここ二日間ほど、ノア様のお食事に偏りが出ているんです。皇城で甘いもの、そして帰ってから甘いもの、あぐく昨夜は揚げ物でしたから……。申し訳ありません!」

いつもはお野菜もたくさん食べておりますものね。食生活が急に乱れたから、肌の水分量が不足してしまったのだわ!

「カミラは悪くありませんわ。皇城でのおやつをお断りはできませんし、帰ってからはわたくしがノアにねだられるまま与えてしまったのですもの……っ」

わたくしのせいだった!

あまりの愛らしさに負けてしまいましたのよっ。わたくしのおバカさん!

「だけど大変ですわ……。ミランダ、料理長に今日は豚肉と豆類、卵と野菜を中心にしたメニューにするよう伝えてちょうだい」

「かしこまりました。奥様」

ミランダに指示すると、すぐに厨房へと向かってくれる。その行動力、素晴らしいですわ。

「カミラは綺麗なお水を用意してもらえるかしら。あと、先日石鹸作りをした時にヤシの実やオリーブの油脂から抽出した、とろっとしていたアレ、持ってきてちょうだい」

「は、はい!」

ノアはキョトンとして、首を傾げるばかりで、自分の肌が荒れていることに気付いていないよ

うだ。

「ノア、ほっぺたかゆくないかしら?」

「ん〜……あのね、しゅこおし、かいかいよ」

やっぱりかゆいのね……。わたくしが悪いのよ。甘いものや揚げ物を食べさせてしまったから……。気を付けてあげられるのはわたくしだけなの!

「ノア、ごめんなさい。そのかいかいはね、お母様が、おやつをあなたの欲しがるままに与えてしまったから……」

「おかあさま、わりゆい、ないのよ。よちよち」

「ノア……」

肌の乾燥ごとときと大袈裟に思われるかもしれないけれど、食生活の乱れは後々大きな病気に繋がりますもの。気を付けなくてはいけないわ。それに、ノアのふにふにマシユマロ肌は、人類の宝よ!

「奥様! 持ってきました!! これですよねっ」

カミラが持ってきたのは綺麗な水と、ヤシの実やオリーブの油脂から抽出した、いわゆるグリセリンというものだ。

水100CCに対して、グリセリンを5〜10CCほど混ぜるだけで化粧水ができる。精製水が良いとも言われるが、実は浄水でも大丈夫なのだ。

精製水だと日持ちがしないのと、準備に時間がかかるというのもあるので、今回は浄水にしても

らった。

前世で手作り化粧水のイベントに参加したことがあったから、知っておりましたのよ。

ここにローズマリーをウオッカなどのアルコール度数の強いお酒に漬けて、一〜二週間置き、エキスを抽出したものを精製水で薄め加えると、より効果の高い化粧水となるのだけれど、肌に合わない人もいるので、水とグリセリンだけのものが一番良いのではないかと個人的には思っている。

「さあノア、このお水をお顔やおてに付けましょうね」

「？ おみじゅ、ちゅけりゅの」

そう言って目を閉じるので、ほっぺたと手に付けてあげる。

「ちゅめたーい」

キャッキヤと喜び、はしゃぐものだから、思わず笑ってしまいましたわ。

そういえば、帝都の近くにある、皇族御用達の保養地では、温泉が湧くと聞きますわ。今度そちらへノアを連れていってみようかしら。温泉は肌にも良いですものね。

「かいかい、ないの！」

「お風呂のあとしばらくの間は、このお水を付けるようにしましょうね」

「はーい！」

ノアにエステはまだ早いけれど、天然由来の化粧水やシアバターなら赤ちゃんでも使えますわ。

「……そういえば」

ここで、ふと気になってしまった。

「聖水にグリセリンやハーブエキスを混ぜるとどうなるのかしら？」

消毒し効果がある聖水なら殺菌作用も高そうですし、アレルギーになるようなものも抑えられないかしら？

あら、ちよつと試してみるのもよさそうですね。

なんて、気になりだすと我慢ができない質^{たち}のわたくしは、軽い気持ちで翌日に試してみたのよ。

そうしたら、びっくりするほど肌が綺麗になったものだから、聖水に様々な植物のオイルを混ぜて使うことにはまってしまったの。

そんなある日。

「お、奥様……っ、ありがとうございます!! 奥様からいただいた化粧水で、火傷^{やけど}の跡が消えたんです!!」

「私も、アトピーの跡が消えました!!」

使用人たちにもサンプルを使用してもらったら、思わぬ効果が現れたから驚いた。

「え、火傷跡やアトピーにも効くんのですの……?」

「はい! これでなんの憂い^{うれ}もなく、彼のプロポーズに返事ができます! 本当にありがとうございます……っ」

それはよかったって……ええ……!?

火傷やアトピーの跡が消えるということは、つまり、傷が治るってことですか!?

化粧水を作ったと思ったら、異世界もののマンガに登場するポーションのように、傷が治る液体ができてしまった。

なんで!? 聖水だから、神様のなんかこう、すごい力でグリセリンやハーブエキスの効果が引き上がったとか?

結局その辺の説明はできなかったのだけど、わたくしの作った化粧水は怪我をしてすぐというより、傷跡に効果があるようで、一週間からひと月使い続けると、徐々に綺麗になっていくというものだった。

「傷跡や、傷のひきつれにも効果があるようすわ……」

即効性はない。

けれど……困ってしまいますわ。これは封印した方が良いのかしら……

「奥様、恐れながら、あまり表には出さない方がよろしいかと愚考いたします」

ミランダにも公表しない方がいいと言われた。

「そうよね……。ミランダは使ってみてどうだったかしら?」

「……はい、お陰様で、傷跡が綺麗になりました。くすみも消えて、肌もツルツルになったような気がします」

とても素晴らしい効果ですけど、聖水を美容品として使っていることが教会に知られてしまうと、怒られるかもしれませんわ……

「皆特に赤く腫れたり、ブツブツが出たりはないようすわね」

「はい。やはり聖水が主成分だからでしょうか。ブツブツが出やすい体質の者は、こちらの化粧水を使い始めたことで出なくなったようです」

思った通り、アレルギーを抑える効果があるよね。化粧水というよりは、もはや薬だね。

「それは良かった。洗濯場の子たちのあかぎれなどにはあまり効果がないようだけど……」

先日、洗濯場の様子を見に行ったのだけど、まだ手にはあかぎれがありましたもの。

「そのようなことはございません。確かに即効性はございませんが、傷の治りが早くなり、荒れていた手も綺麗になったと報告がございました」

「そうでしたの?」

「おそらく、ひと月ほど水仕事をしなければ、傷のない美しい手になるでしょう。とはいえ、そういうわけにはいかないのですが。でも多少改善したということで、本人たちはとても喜んでおりました」

なるほど……。それならゴム手袋があれば、水仕事をしてても手が荒れにくいわよね。

洗濯機は無理でも、ゴム手袋の開発ならできるかしら? オリヴァーが今、頑張ってくれているようだけれど。

「洗濯場の使用人には、引き続き化粧水とハンドクリームを塗るように徹底してちょうだい。冬場は特に辛いだろうから、携帯湯たんぽも持ち歩くように。くれぐれも火傷には気を付けてね」

携帯湯たんぽとは、新素材でカイロのような大きさのケースを作り、そこにお湯を入れて袋に入れ、持ち運べるようにしたものだ。

本当はカイロを作りたかったが、作り方がわからなかったので、わたくしでも作れそうなミニ湯たんぽにしてみた。冬場はそれを皆に持たせている。

「かしこまりました。ご指示通り、携帯湯たんぽは使用人全員に支給しております。奥様が作ってくださった新たな制服はポケットが多いですので、そちらに入れております」

厚手の袋に包まれておりますので火傷は大丈夫だとは思いますが、気を付けるように伝えておきます、とミランダは言って、いつもはあまり表情を変えない彼女が少しだけ微笑んでいた。

ちなみに、携帯湯たんぽと、布団に入れるタイプの湯たんぽは、ウォルトが目をつけ売り出したところ、大ヒットしている季節商品なのだ。

ウォルトったら、本当に商才がありますわよね。

「それとミランダが言う通り、化粧水は表に出さず、デイベイン公爵家でのみ使用しましょう」

「それがよろしいかと」

「皆にも口止めしておいてもらえるかしら」

「かしこまりました」

化粧水は表に出さなければ問題にはなりませんわよね！

そう思っていたのだけれど。

「奥様……っ、お願いします！　どうか……っ、どうか、娘にこの化粧水を使用する許可をいただけないでしょうか……っ」

わたくしの前で土下座するメイドに驚く。

「落ち着いて……。娘さんに何かありましたのね？　詳しく教えてもらえるかしら？」

「っ……うう……奥様……っ」

メイドは涙を流しながら話してくれたのだ。十歳になる娘さんが、顔に火傷を負ってしまったことを。

「それは大変ではありませんの！　化粧水の前に聖水でよく洗わなくては！」

感染症になってはいけませんもの！

「は、はい……っ、お医者様にもそのように言われ、こまめに聖水で顔を洗うようにしております」

「では、痛みが引くまでは聖水だけで洗い、痛みが引いてから化粧水を付けるようにいたしましょう」

「っ……奥様、ありがとうございます……っ、この御恩は決して忘れません！」

額を地に付け、肩を震わせるメイドの背を撫でる。

「今まで不安だったでしょう。娘さんが落ち着くまで、有給休暇を取りなさい」

「奥様、ですが……っ」

わたくしの言葉を聞いたメイドが不安そうに見つめてくるので、改善したばかりの雇用形態の話をする。

「本来、有給休暇はこういった時に長期間休みを取るためにあるのですわ。あなたが皆にお手本を見せてちょうだい。ミランダ、大丈夫ですわよね」

「はい」

わたくしは消炎効果のある植物を探してみましよう。今のままの化粧水では、治るまでに時間がかかりそうですもの。

こうして改良を繰り返して誕生したものは、結局、化粧水ではなく薬として使われるようになるのだけれど、わたくしは人類の宝であるノアのマシユマロ肌も、メイドの娘さんの肌も守れたので、満足ですわ！

「おかあさま、ノア、おみじゅぬりぬり、おじかんよ」

「フフツ、そうね。化粧水、お母様が塗ってあげますわね」

「あーい！」



ということがありましたのよね。

あの時のノアも可愛かったですわあ。

その後、皇后様が使用人やわたくしの肌が綺麗になっていることに気付いて、問い詰められ、いつの間にか皇后様も使用することになって……

あれから一年経ったのですから、そろそろ世に出そうかしら。なんて思っていたら、ちょうどこの会合が開かれたのよね。

「イザベル様の化粧水『レース・アルカーナ』に関しては、教会^{うんぬん}云々はなかったことにしましょう。クレオ大司教は信頼できる人かもしれないけれど、エンプティの件が解決していない今、教会にこれ以上の富と権力を与えるべきではないわ」

皇后様の話で、ハッと我に返る。

テオ様やお父様、皇帝陛下まで真剣な顔つきだ。

わたくしが勝手に考えていたことをつい口走ってしまったために、議題にまで上ってしまいましたわ。独断専行でクレオ大司教に伝えていなくてよかった……

「私も皇后陛下と同意見だ」

「異論はございません」

テオ様とウォルトがそう言っただけ。

「娘が申し訳ありません……」

お父様が恐縮しながら呟くので、申し訳なくなつて、意気消沈しましたわ。

「申し訳ありません……」

自分の浅はかさを反省してしばらく項垂^{うなだ}れていたのだけれど、また間違いを犯してはいけなないので、聞いておきたいことを今のうちに聞かなければ、と口を開く。

「あの、教会に関しては理解いたしました。化粧水は、今は、ほぼ薬として使っています。売ります際はもっと効果を薄めた方が良いでしょうか？」

「え、あれって薄めることができるの!？」